

狭間神社に残る

「鍋千代」の釣燈籠

大阪狭山市教育委員会 橋上猛雄



西池尻の狭間神社に、釣燈籠

がある。狭間神社は、江戸時代には「牛頭天王社」と呼ばれていて、当時の人たちは流行病が村に入り蔓延することを防ぐために、疫病から人々を守って、疫病に感染しないようにしてくれる神として有名であった牛頭天王を祀ったのである。有名な京都の八坂神社も、牛頭天王をお祀りする神社で、華麗で豪壮な祇園祭は疫病退散のための祭りなのである。半田にある狭山神社も、江戸時代には牛頭天王社であった。池尻村の氏神であった狭間神社は、明治四二年に狭山神社に合祀されたが、現在も旧地に拝殿が残る。

この狭間神社の拝殿に燈籠が一对吊られている。釣燈籠と呼ばれるものである。狭山神社には

鉄製の桃山時代に製作されたと

想定される古い釣燈籠が存在し、大阪狭山市の指定文化財となっている。狭間神社の釣燈籠は六角形で、江戸時代に製作されたものである。「牛頭天王御神前」「北条鍋千代公」「河州丹南郡佐山池尻村」「奉掛金燈籠御武運栄久所」「享保元丙申八月廿五日」という銘文が刻まれ、狭山藩北条氏の家紋「三ツ鱗」が切り抜かれている。

北条鍋千代とは、狭山藩五代藩主北条主氏朝の三男で、宝永七年（七二〇）七月二日に狭山の陣屋で生まれた。狭山で生まれた氏朝の初めての男の子である。母は氏朝側室の久子。氏朝が著した『氏朝公日記』には、鍋千代の誕生、袴着、部屋建、下帯など、鍋千代が経験した人生儀礼

が書かれている。

釣燈籠に刻まれた享保元年（七二六）は、鍋千代七歳の時であり、今でいう七五三の意味合いもあつて池尻村の氏神に奉納したものだと言われている。江戸時代は、子どもの死亡率が高く、無事に大人になることは容易ではない。氏朝の二八人の子どもの内、三歳以下で早世した子どもは八人、実に半数に近い。しかも十代で亡くなった子どもは六人で、二十歳以上生きた子どもは四人しかいない。

鍋千代は享保三年（七二八）の十月、九歳のときに父氏朝の兄である氏澄の養子となった。これは二五〇〇石の旗本であった氏澄の息子の氏園が、同年八月に二十六歳で亡くなり、跡継ぎがいなくなったことから鍋千代

に白羽の矢が立てられたのである。氏澄の家は、氏朝の父である氏利の家であり、氏利は狭山藩二代藩主氏信の弟にあたる。享保四年三月、鍋千代は狭山から江戸に移った。その年の十一月には養父氏澄が亡くなり、十二月には家督をつぎ、右近氏副と改名した。こうして鍋千代は、わずか十歳で旗本を継いだのである。しかし、それからわずか二年

後、鍋千代は疱瘡を患い、十二歳の生涯を閉じた。知行・屋敷は召し上げられ、お家は断絶した。狭山で生まれ、狭山で育った男の子が、江戸に出て父の実家の旗本を継いだ、江戸での生活は余りにも短かった。鍋千代は北条家の菩提寺である渋谷祥雲寺に葬られた。鍋千代の書いた文書なども現存せず、父氏朝の日記や今井の法雲寺（堺市）に残る父の手紙に、わずかにその名が出てくるだけである。しかし、江戸時代を通じて狭山藩領であった池尻村の狭間神社には、彼が奉納した釣燈籠が、三百年の歳月を経て、今も存在している。

追伸

狭間神社には、鍋千代の釣燈籠以外にも、天和元年（六八二）に狭山藩士が奉納した市内最古の手水鉢も現存し、池尻村に陣屋を構えた狭山藩と狭間神社との親密な関係を示している。

※知行：幕府が旗本に与えた土地
地：大名が家臣に与えた土地



狭間神社：大阪府大阪狭山市池尻中1丁目13-7